

Computer Report

Vol. 50 No. 9 9月号 (通巻 672 号)

はじめの言葉

■すでにお知らせ済みのことだが、本誌は本年創刊 50 周年を迎えたのを機に、本格的な電子メディアとして再出発することとした。「再始動 虎を縁(えにし)に 燃える夏」と詠んでくれた知人がある。本誌創刊者の藤見虎敏が寅年生まれであったこと、そして WebCR の新創刊/再始動の本年が寅年であることから、こう詠んでいただいた。燃えるように暑い夏、身の引き締まる思いで拝受した次第である。

■コンピュータ業界の専門誌として我が国で最初に創刊された本誌だが、このたび購読料を前提にした定期刊行物で本格的な電子メディア化の道を選んだのも本誌が我が国で最初のものである。ホームページに掲載されたものはすべて無料、著作権の放棄だと勝手に解釈したり認識する勢力があったり、それが常識だと決めつけている勢力もあるようだが、本誌はあえて購読料をベースとした電子メディア出版の道を選んだ。

■創刊以来 50 年を経たメディアを編集してきて今、改めて「コンピュータって何だ」と思う。現代社会のいたるところで活用されるようになったし、コンピュータなくしてはというより、あって初めて成り立つ産業やビジネスも圧倒的に増えている。ComputerReport のタイトルを変更することも考えた時期があった。しかし「コンピュータがあって当たり前社会」の到来の時にそうしようということで見送ってきた。

■このたび WebCR という別称を採用したのも、ある意味「いい潮時」だったかと思う。読者諸賢の中には、これからは購読料がフリー(無料)になると思われた人もいるかもしれないが、あえて有料のままとさせていただくことにした。電子メディアの課金問題は、既存の出版社は言うに及ばず、新規参入のインフォメーションプロバイダ(IP)も含めて関係者全員のテーマとなっている。本誌も様々な対応を考えていく必要を覚悟している。

■過日、インターネット上にある他人の論述/記述から適当な文節を拝借整理して卒業論文として提出する学生が多く、合格落第判定を含めて採点する教授を悩ませているという新聞記事を目にした。いわゆるコピー&ペースト(複写転写)機能をフル活用して作り上げられた卒論である。当然ながら、論旨の一貫しないものも多いらしい。コピペ学生が自分で書いた論文を理解してないどころか、読んでもいないケースもあるようだ。

■気の毒なのは、そんな論文を学生の数だけ読まされている教授の側だ。職業とは言え、一種の拷問的苦役である。心より同情申し上げる。万卷の書という表現があるが、学者や研究者など特殊な職業人以外、一万冊に及ぶ書物を読破する人はそう多くない。コピペもコンピュータ活用分野のひとつだが、学生が手抜き卒論のために使った誤魔化し手段だと認識していて欲しいものだ。これがものごとを理解する手段だと思っていたら恐ろしい。

■Web サイズで流れる情報洪水と今後人間はどう対処していくべきか、これからが正念場である。同じ情報を受け取っても、誰もが貴重な情報だと認識するとは限らない。情報の価値は人によって変わる。人それぞれの情報処理力で決まる。感性だと言えるかもしれない。すべての人に共通して大切だという情報は少ない。また公開すべき情報、公開していない情報、してはいけない情報もある。情報の価値が生まれる理由はたくさんある。(藤見)